

Lipenkov博士が参加されていて受賞を祝ってくださったことに感激しました。これからも平田賞に明記されておりますように研鑽に励み、さらにこの美しい物質の魅力を探求していきたいと思えます。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお

願い申し上げます。最後に、ハイドレートを研究し始めた頃常に私を励ましてくださり、志半ばで他界されてしまった黒田登志雄先生、後藤明先生、三谷至君にこの喜びを報告し、これからの研鑽を誓いたいと思えます。

## 平田賞を受賞して

名古屋大学大学院環境学研究科 藤田 耕史

このたびは日本雪氷学会平田賞をいただき、大変光栄に存じます。受賞の対象となりました「アジア高山域における氷河収支の特徴と気候変化への応答」は、「ネパールヒマラヤでの現地観測による、1970年代から1990年代にかけての氷河縮小の実態把握」と「チベット高原の寒冷氷河を対象とした数値実験による、夏期涵養氷河の質量収支特性」の2つの軸からなります。

1992年4月、名古屋大学大学院に入学したまさにその月から、「チベット高原の水循環における雪氷の役割(通称CREQ)」プロジェクトに参加する機会を得て、氷河のイロハも知らない私のチベット通いが始まりました。修士の2年間のうち計5ヶ月を中央チベットのタン格拉山ですごし、寒冷氷河の質量収支における再凍結の影響を修士論文にまとめることができました。

博士課程に進学すると同時に「ヒマラヤにおける雪氷学術調査(通称CREH)」プロジェクトが走り始め、一年のほぼ半分をネパール各地での氷河測量に費やす日々が約6年間続きました。この結果が「ヒマラヤにおける氷河縮小の実態把握」となりました。それまでも末端位置の変化を押さえた研究は数多くありましたが、氷河の厚さ、すなわち「量」の変化を数字として表したところに意義があると思っています。

ネパールでは現地観測に走り回り、日本ではプロジェクトの事務局を仰せつかり、慣れない事務仕事で関係者にご迷惑を掛け続けていた傍ら、なんとかチベットの氷河質量収支をモデル化することができました。このモデルを用いた数値実験の結果、夏期に降水が集中することによる氷河質量

収支の特徴について、その輪郭を示すことができました。特に、アルベドを自律的に決定する仕組みを作れたことと、冬に降水があった場合の仮想的な氷河を作り出すことで、夏期涵養氷河の特徴をわかりやすく提示できたことに意義があると自負しております。

このように振り返ってみますと、順風満帆な研究生活のように見えますが、これらの「課題」は私自身の問題意識から芽生えたものではなく、既に1970年のはじめには諸先輩方によって問題提起されていたものです。これらの議論は、通称「諸問題」とか「青本」などと呼ばれている「ヒマラヤ山脈、特にネパールヒマラヤの氷河研究における諸問題」(比較氷河研究会, 1973)にまとめられています。「諸問題」やその後刊行された「Seppyo, Special Issue, 38~41」を紐解いてみればわかることですが、ヒマラヤにおける氷河縮小の実態把握は、1970年代の「種蒔き」ともいえる現地測量の結果を1990年代に「収穫」した結果といえます。また、夏期涵養氷河の特徴については、定性的には既上記の「諸問題」で触られていますし、1980年代始めには私の指導教官でもある上田豊氏によってヒマラヤのAX010氷河を対象に議論されています。このため、自分の研究は決して「新たな発見」や「独創的なアイデア」、「新たな仮説」などを伴うものではありません。

現在、アジア地域でおこなわれている2, 3の研究プロジェクトに参加させていただき、氷河観測やアイスコア掘削などの観測・解析を通し、多少なりとも貢献しているとの自負はありますが、

平田賞という「将来投資」をしていただいた今、「高所作業」以外には手に職のない自分が「本当に知りたいこと」はなんなのだろう?』と自問自答の日々が続いています。

いささか後ろ向きのお話を続けてしまいましたが、これまでのチベット・ヒマラヤの調査は実にエキサイティングでした。1970年代の写真やスケッチを片手に、「そこにあったはずの氷河」がなくなっているのを目の当たりにした時の鳥肌が立つような感覚は、この「重労働」を続ける上で重要なモチベーションになっています。

「見たことのない景色・風景を見てみたい」という、いささか不純な動機でこの業界に足を踏み

入れ、研究における理念や哲学がないままここまでできてしまったような気がします。「××を明らかにする・したい」という信念を持ってたらいいと思うものの、なかば開き直りのような気分で「現場で考えることも捨てたものではない」ことを、論文などを通して示していければと考えています。

最後に、チベット・ヒマラヤでの調査・研究のチャンスを与えていただいた上田豊・中尾正義両氏をはじめとする諸先輩方に感謝いたしますと共に、1990年代を一緒にすごした同世代の友人達と今後も楽しい調査活動ができることを願ってやみません。今後ともよろしく願いいたします。

## 平田賞を受賞して

北海道開発土木研究所 松沢 勝

このたび、平田賞をいただき、大変うれしく思います。初めて、小野会長から電話があったときは、何かの間違いかと思ったほど、思いがけない受賞です。今までご指導いただいた、竹内政夫様をはじめとする北海道開発土木研究所の諸先輩や、私の研究を認めていただいた推薦者に深く感謝するとともに、今後も平田賞の名に恥じない様、心新たに、努力していきたいと決意する次第です。

受賞対象となった「気象条件からの視程推定手法に関する研究」は、竹内氏に研究のヒントをいただき、地道に続けてきたものです。全国大会で発表を続け、研究を始めてから4年以上かけてようやく、『雪氷』に論文を投稿しました。しかし、吹雪時の視程を予測するという「役に立つ研究」、までには不十分な部分が幾つか有り、引き続き研究を進める必要性を強く認識しているところで

さて、私が、雪氷学といえるものに初めて関わったのは、北大地球物理学科3年の時の学校祭です。何か市民に向けて出し物をしようと、公開実験を仲間とともに企画しました。たまたま、気象学講座が所有する2室の低温室のうち前室を使っ

ていなかったの、そこを借りて低温実験をすることになりました。私の担当は、「チンダル像」と「円盤結晶」でしたが、「チンダル像」が観察できず、苦勞しました。簡単に言うと、大きな単結晶氷を製作することができなかったのです。結局、卸売市場の近くの氷屋から業務用の板氷を購入することとしました。幸いなことに、氷屋の主人が大変親切な方で、事情を話すと、無料で提供していただきました。いただいた氷を石けん状に切断し、強い光を当てると、氷の中に気泡がいくつも発生し、その周りに氷の融けた痕が六花状にうっすらと確認でき、何とか成功です。一方、円盤結晶の実験は、人工雪の実験や氷の薄片の実験と一緒に低温室内で行いました。低温室の温度は $-15^{\circ}\text{C}$ だったため円盤結晶の製作にとっては、温度が低すぎましたが、樹枝状の人工雪の結晶を作るため、やむを得ませんでした。

公開実験は、結構人気で、一度に7~8人程度しか入れないため、順番待ちができる程でした。もっとも、低温研の某先生には「これは氷の薄片じゃなくて厚片だね。」などと皮肉を言われる程度のものでしたが…。公開実験は2日に渡って行いましたが、2日目の朝、大変なことがおきまし